

## 瀬木慎一(美術評論家)

度々の越後探訪のあるとき、斎藤真一は、出雲崎で、一人のふしぎなゴゼの話を書いた。仲間から離れて、犬を捕まえる職業の男と一緒に住んでいたが、ヴァイオリン弾きと恋をし、けんめいに別の生き方を試みるが、ついに果たすことができなかった悲運の盲女の話である。

周知のように、斎藤は、この十年、越後、信州の村々を隈なく歩き、ゴゼの実態をつかむ貴重な仕事をしてきているが、かれが知りえたゴゼのなかでも、この女性の人生は極めて特異なものであり、強く胸を打つものがあった。そこで早速、彼女の人生を追跡し、可能な限り明確に再現することに努めた。

その頃、斎藤は、津軽じゃんがら節の制作に打ちこんでおり、数年来のゴゼ連作は、これを以って終るかと思えたが、このお春という特異なゴゼの人生にかかわることにおいて、ふたたび、このテーマを描きつづける情熱を感じた。そして、じゃんがら節の完成を待つか待たないうちに、新たな連作が描きはじめられた。

このお春ゴゼの連作は、作者にとって、ゴゼというテーマの新しい展開であり、その深化にほかならない。すでに、歴大な数の作品をこのテーマによって描いてきたかれが、これまでに努力し、積みかさねてきたもののすべてを、ここに集約しようとしている。

その意味では、この連作は、作者自身の内部で、極めて重要な意義をもつ。わたしは、盛夏のある午後、アトリエを訪ねて、制作中の諸作を見たが、そこには、馴れに伴うフォルマリズムが無く、むしろ、出発点に戻ったような初々しさすら感じられ、感銘を深くした。ゴゼというテーマは、一見派手な世間的関心をひいたようであるが、この画家ほど、それを真剣に、人間の問題として、また造形の問題として追求している人はいないだろう。

斎藤真一は、自分の描く人間と運命を伴にしている画家なのである。